【研究ノート】

「龍渓硯」の探求と制作に向けて

—郷土における文化遺産の継承を見据えた実践研究—

〔平成27年度信州アカデミア(信大COC事業)研究教育補助事業〕

小林　比出代

1．本研究の背景と目的

今から170年ほど前，高遠藩の上島村から産出される黒石が注目され，技術指導の施しの上「高遠硯」が制作された。大名への献上がなされ，民間へ流伝することがなかったため，一時期は「秘硯」とも言われた当硯であるが，明治になり硬筆が普及したことによって衰退してしまう。しかし，昭和に入ってから硯が見直され需要が増したことで再び脚光を浴びるようになった。昭和10年には，時の首相犬養毅に認められ，長野県知事（当時）大村清一氏がこの石を「龍渓石」と命名し，この石で作った硯を「龍渓硯（りゅうけいすずり）」と呼ぶようになった。

石質が硯としての条件を具備しており，書道家や画家を初め広く愛用された龍渓硯は，昭和62年に長野県知事指定伝統的工芸品に指定された。しかし，平成に入って久しい現在では後継者が途絶えつつあり，その継承はまさしく風前の灯の状態にある。当該地域のみならず長野県の財産として誇るべき文化遺産が消滅しつつあること，そのことにより貴重な伝統が途切れ，龍渓硯にまつわる事柄が過去の産物となってしまうこと等，龍渓硯に関する現況から派生する諸問題を看過することはできない。

以上をふまえ，龍渓硯の歴史や現状を明らかにした上で，後継者不在により生じる影響を念頭に置きながら，龍渓硯硯工から制作方法を学ばれた長野県立高校書道科の先生御指導のもと，実際に本学部学生が龍渓硯を制作する実践研究を試みる。本研究に携わる学生は，本学部すなわち県内唯一の教員養成系学部に在籍し，近い将来自身が教育の発信者となる。本研究を，学生自身が地域の文化遺産に関する専門知を深め，受け継いだ知識技能をその先の世代へ伝えることにもつなげたいと考える。

本稿では，上記研究の前段として龍渓硯の制作工程についてまとめる。

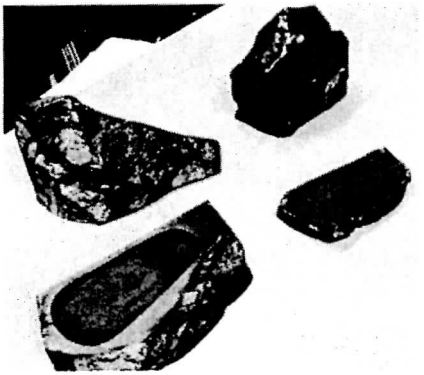

写真１　龍渓硯（翠川希石氏作）

※左は蓋をとった姿

２．龍渓硯の制作工程

龍渓硯本舗 翠川硯店の翠川ゆり子氏と長野県高遠高等学校教諭 泉逸男先生の御講義，及び辰野町制作のＤＶＤ「平成 22 年度長野県デジタルアーカイブ推進事業　龍渓硯」を参考に，龍渓硯の制作工程を示す。なお，本章で用いる画像は先述のＤＶＤによるものである。

①

①石取り

採石場で，鑿（のみ）とトンカチを用いて，龍渓石の原石を採る。この時点で硯になる石かを見極める。

②

②石割り

①において塊で採石される原石を，硯の大きさに割る。この時に，どのような硯にするのか，硯の完成形を見出す。石が縦に割れることを活かして蓋付きの硯を制作することも可能である。

③

③石造り

切り出した石の両面を平らに研ぐ。角は，面を平らにした後，砥石を使って削る。

④硯彫り

石の形に合わせて（石の形を活かして）硯を彫る。鑿は四角／丸／半月型（「くり」）の３種類を用いる。硯の「海」と「陸」の調和や使いやすさ，美観等を考え合わせながら，一気に刀を進めず徐々に丸みを出す。

「陸」と「海」それぞれを彫った後に縁を彫る。続いて，硯の裏面に刀を加え，硯の据わりをよくする。

④

⑤磨き

砥石を用いて硯面（「海」「陸」）を整える。その後，紙ヤスリで表面，側面，背面のそれぞれを丁寧に磨き，より滑らかに仕上げる。

⑤

⑥彫刻（※必須工程ではない）

硯の蓋に彫刻を施す。装飾として蒔絵等を入れることもある。彫刻の対象物は水に関係する生物が多く用いられる（右の写真では蛙を彫っている）。

⑥

⑦虫あなふさぎ

硯全面に漆で練った墨を薄く塗り，小さな穴をふさぐ。一日置いて，サンドペーパーで磨く。

⑦

⑧漆塗り

生漆をテレビン油で延ばして硯面以外の面に塗り，光沢を出す。硯面は墨を磨る箇所となるため塗らない。数日間乾燥させて完成となる。

⑧

３．本研究の今後の展開 ―実践概要と成果発表―

本研究では，まず以下の事項に関する調査検証を行う。

○龍渓石や龍渓硯の歴史（龍渓石の石質／龍渓石の産出から龍渓硯誕生への変遷／龍渓硯の現在等）

○現存する龍渓硯の特質

○龍渓石原石から龍渓硯完成までの詳細な工程

次に，龍渓硯本舗 翠川硯店から，日本工芸会正会員 翠川希石（本名 袈裟美）氏が生前①～③までの工程を完了されていた龍渓石をお譲りいただき，翠川希石氏から龍渓硯の制作技法を直接学ばれた泉逸男先生の御指導のもと，書写書道教育研究室の学生が④「硯彫り」と⑤「磨き」の工程を試みる。（⑦～⑧は翠川ゆり子氏にお願いする。）

上記の調査内容と制作過程を，完成した作品とともに「平成二十七年度信州大学教育学部卒業書道展」（於信濃教育博物館 第１展示室及びロビー）において展示発表する。

以上を総括した拙稿は，『研究紀要 第21集（平成27年度）』（日本教育大学協会全国書道教育部門編 2016）に収録予定である。

写真２　卒業書道展での展示発表

（於 信濃教育博物館１Ｆ展示室へ続くロビー）

信濃毎日新聞夕刊

2016（平成28）年２月18日（水）

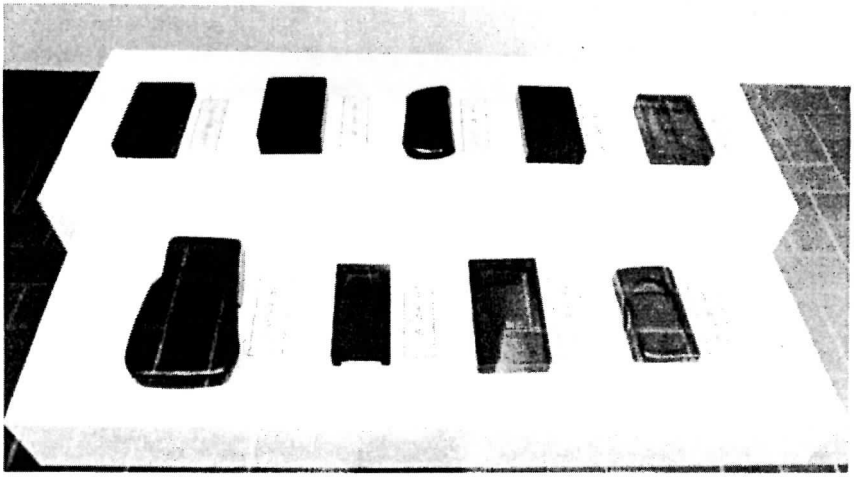

写真３　完成した龍渓硯（※「写真２」の左下部分。ガラス越しに撮影。）

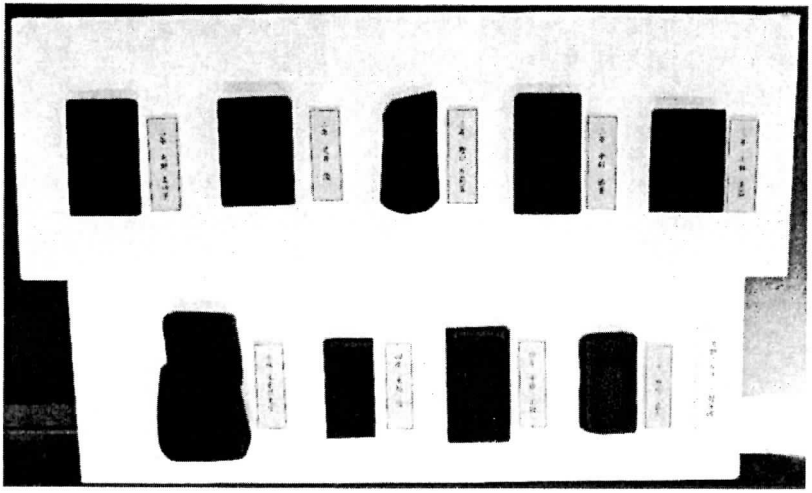

写真４　完成した龍渓硯（※「写真２」の左下部分。作品真上から撮影。）

【参考資料】○「信州 龍渓硯」（龍渓硯振興会事務局作成パンフレット）
○「平成22年度長野県デジタルアーカイブ推進事業　龍渓硯」
（辰野町制作ＤＶＤ 2010）

（こばやし　ひでよ　信州大学教育学部）